

本との 出会いを 楽しむ

第33回

動物行動学者の本棚

「動物をとおしてヒト を見る」

曾我部 篤

弘前大学農学生命科学部准教授。専門は行動生態学・進化生態学で、魚類における一夫一妻の進化などの研究をおこなっている。



1冊の本との偶然の出会いがその人の生き方や価値観を決定づけることがあるとするならば、私にとってのそれは予備校生時代に電車待ちの書店でたまたま手にした『ソロモンの指環－動物行動学入門－』かもしれませぬ。

この本は、動物行動学者として最初（にして最後）のノーベル医学・生理学賞授賞者となったコンラート・ローレンツによるエッセイ集です。ローレンツの名を知らない人でも、彼が発見した生まれただけのヒヨコが初めて目にした動くモノを親だと思い込む〈刷り込み〉という現象を聞いたことがある人は多いのではないのでしょうか。本の中でローレンツは、公私にわたって様々な動物を飼育してきた経験と動物行動学者としての確かな目で、ときにユーモアを交えながら動物行動の不思議を解き明かしていきます。自然な行動をさせるため、動物を檻に閉じ込めることを由としなかった彼は、自宅でもワタリガラスやマングースなどの動物を放し飼いにしており、危険な動物から愛娘を守るために娘の方を檻に入れていたという、今の時代なら児童相談所にすぐ通報されてしまいそうなエピソードも紹介されています。

第12章「モラルと武器」で語られる内容は、文字どおり人生を変えるほどの衝撃を当時の私に与えました。この章でローレンツは、闘争する2匹のオオカミの一方が服従の姿勢をとれば、勝者による更なる攻撃は起きないという観察をとおして、大きな牙のような強力な武器を進化させた動物では、その使用を抑制する仕組みもまた同時に進化させたという洞察

を得ます。そしてこう述べます。「自分の体とは無関係に発達した武器をもつ動物が、たった一ついる。したがってこの動物が生まれつきもっている種特有の行動様式はこの武器の使いかたをまるで知らない。武器相応に強力な抑制は用意されていないのだ。この動物は人間である。」と。この本の原著初版が発行されたのは1949年、さまざまな近代兵器が投入された世界大戦を経て、人類を一瞬で滅ぼす兵器の開発を各国が競っていた時代です。そしてそれは今も変わりません。動物行動の研究が、単なる自然誌的・博物学的価値を超えて、動物としてのヒトの本質を理解する助けとなることを学び、動物行動学の道に進むきっかけをこの本が与えてくれたと感じています。

「誰もが見ていながら、誰も気づかなかったことに気づく、研究とはそういうものだ。」

この本との出会いから30年、動物行動学者の端くれとなった私は、ローレンツのこの言葉を胸に、今も研究を続けている。

（そがべ あつし）

「ソロモンの指環：
動物行動学入門」

コンラート・ローレンツ著：

日高敏隆訳

和図書(第1書庫

2F~5F)

481.78

L88